

2018年度鹿児島純心女子大学キリスト教文化研究センター主催
教職員全体研修会「キリスト教と教育」

基調講演「聖書が教える愛」

西経一氏 長崎南山中学・高等学校長

日 時:2019年2月22日(金) 14:00～16:30

於 :サンタマリア館 階段講義室

【開会の挨拶】

岡村：それでは時間になりましたので、始めさせていただきます。皆さまには本学、キリスト教文化研究センターの平成30年度公開セミナーにお集りいただき、ありがとうございます。本日、司会進行は私、センター所員の岡村が務めさせていただきます。よろしく願いいたします。それでは早速、始めたいと思います。最初に松下学長よりごあいさつ申し上げます。

【松下栄子学長挨拶】

松下：皆さま、こんにちは。本日のキリスト教文化研究センターの公開セミナーにお集りいただきまして、誠にありがとうございます。まずは、このセミナーの講師で、長崎南山の校長先生でいらっしゃる西経一校長先生が足元の悪い中、雨の中、遠路、鹿児島島の薩摩川内市にあります鹿児島純心女子大学までお越しくださしまして、誠にありがとうございます。

西神父様というお名前を伺いまして、私がまず思い浮かべましたのは大変ユーモアあふれるお話をされる神父様だという、そういうイメージがございます。西神父様は長崎南山の、現在、校長先生をしていらっしゃいますが、名古屋の南山の校長先生も長い間していらっしゃいまして、中等・高等教育につきましては大変教育に熱心な方でございます。特に、私どもの、この鹿児島純心女子大学・学園、それから西神父様が所属しておられます南山学園も同じカトリック精神に基づく教育を共に目指している学園でございます。

名古屋の南山の教育理念は「人間の尊厳のために生きる人を育てる」という、そういう教育理念だと伺っております。私どもの人さまと神様、「神様と人さまに喜ばれる人を育てる」と、そういう建学の精神を掲げ、そしてカトリック精神に基づく教育を行うという、そういう点におきましては同じことなのかなという、そういう印象を持っております。私も新人の採用の面接のときに必ず、先生方もご記憶にあるかと思いますが、「本学はカトリック精神に基づく教育を行うところですので、これから本学でお勤めいただくに当たりまして、このカトリックの精神、そして建学の精神にご

理解とご賛同を頂けますか」ということを確認させていただいております。

先生方もどうぞ、この間、そのことを思い出しながら、今日は「キリスト教と教育」というテーマの下で、「聖書が教える愛」という、そういう演題でお話しされるというふうに伺っております。私どもも西校長先生のお話を通して、さらにカトリック教育に理解を深めるいい機会になればと思っております。どうぞ、西校長先生、よろしく願いたします。

【講師紹介】

岡村：ありがとうございます。続きまして、センター所員の藤尾先生より講演者の西経一神父様の講師紹介をお願いいたします。

藤尾：それでは、西経一先生を改めてご紹介をいたします。先ほどの学長のお話にもございましたが、先生は1955年、長崎でお生まれになりました。その後、1981年3月に南山大学文学部神学科をご卒業の後、1983年3月に南山大学大学院文学研究科神学専攻修士課程を修了しておられます。また同時に、司祭に叙階されておられます。

そして、1983年4月から長崎南山高等学校教諭を振り出しに、南山高等学校・中学校や、また南山大学等でも教鞭を執っておられます。司祭としてのお務めを果たされる傍ら、教育者としても数々の素晴らしい業績を残されているとお伺いしております。

さらに、2015年4月からは、現在までですが、長崎南山中学・高等学校長としても大変ご多忙な毎日をご過ごしておられます。そのような中で、先生のご講演は聞く者の心に深く迫り、感動を禁じ得ないということで、各地から講演の依頼が殺到しているということのようです。

本日は、そのようなお忙しい先生においでいただき、「キリスト教と教育」というテーマの下で「聖書が教える愛」と題してご講演を頂きます。実は先生は小学校1年生のときにお母さまを亡くされたそうでございますが、先生のご著書『君たちへ』というご本にも多分、書いてありますけれども、その中で「かなしみを知る人におなりなさい」という、そういう一節がございます。「神さまがそんなかなしみを与えられたのは、まんまるの愛が生まれるためなのです」と言っておられます。

さらに、「愛は痛むものなんだ。自分の身を裂き、身を削る。心を砕き、心を配る。だからとってもとって痛いんだ。身を裂けば血が流れる。だからそれは命がけなんだよ。命をかけても伝えたい、それを愛と言うんだ。愛を知っている人は痛むことを知っている。愛する人はかなしみを知っている。その愛をいちばん最初に教えて下さ

る方を父と言い母と言うんだよ。その痛みには、君もまた愛を伝える人になりなさい、愛する人となりなさいというお父さんお母さんの願いが込められているんだ」。こういう一節がございます。

悲しみを知ることから生まれる愛。今日のテーマは「聖書が教える愛」ということですが、そういうお話も聞けるのかなと期待をしているところです。先生の人間としての根底に流れるようなもの、そういうものを感じた次第でございます。

一方で、先生のお好きな作家は山本周五郎。好きな本は聖書。リフレッシュ法は囲碁と将棋という、大変親しみやすい一面をお持ちのようでございます。今日は先生のお話を伺えることを大変楽しみにしてまいりました。西先生、どうぞよろしく願いいたします。

【講演】

皆さん、こんにちは。よろしく願いいたします。先ほど学長先生のほうから、それこそ身に余るご紹介を頂きまして感謝します。大体、中学・高校生はこの時間帯が一番眠いんですね（笑）。ですから、この時間にお眠にならないような話ができる教員を優れているというんですね。私は今、眠りが覚めましたが（笑）、それでは今からお話しますので、お付き合いください。

私は今、学校で校長というものをしていますが、学校で一番暇なのは校長なんですよ。大学の学長は別ですけど。校長はもう一番暇なんですよ。どうしてかっていうと、あまり忙しい、校長が毎日忙しい学校は危ないですよ。校長が暇でぶらぶらしてるような学校は本当に安心してお子さんを預けられると思います。私はもう、だから、生徒たちに「廊下の隅にある消火器みたいなもんです。ほこりをかぶって使わずに、そこにいるのが一番いい校長先生ですよ」と。これが毎日使われるようになると、学校は持たないんですよ。だから、そう言う高校生たちはもうそれだけで笑いますが、ここは一切の反応がない（笑）。もう少し気楽にやってください。あー、疲れる（笑）。

それで、その一つ一つのことを今からゆっくり話していきますが、中学1年生から高校3年生までいるんですね。そうすると中1は、男の子ですから、男子校ですのうちは、とってもかわいいんですよ。もう、かわいい。ここが滑らかなんです、まだ。背も、もう本当にA君なんていうのは、もうこれぐらいなんですよ。もうお人形さんみたいです。で、「こんにちは」と言うのと、「こんにちは」。「おはようございます」と言うのと、「おはようございます」って、もうかわいいんですよ。「おはようございます」と言って、「ああ、おはようございます」。

ところが、これが中学2年生の夏過ぎぐらいになると、もう顔を上げなくなるんで

すよ、朝のごあいさつのときに。「おはようございます」と言うと、うつむいて、声変わりしかかった声で「ます」しか言わなくなるんですよ（笑）。「おはようございます」と言うと、去年まで「おはようございます」と言っとったのが、「ます」。それで、こう、目は斜め45度です。「ます」。

中3になると、「す」ですよ。「おはようございます」と言うと、「す」。それで、こう通り過ぎた後、私のその背中に向かって「うぜっ」って言うんです（笑）。もう、これが私は大好きなんです。中学、高校の、もう日替わりのように変わっていくんですよ。もう大学生は、ほとんど手遅れですけども（笑）、その中高生っていうのは本当にもう変わるんですよ。その姿がとつともうれしくて、私はそれで随分、大学のスタッフに「残ってくれ」って言われましたが、いや、それだけ優れていたということですね（笑）。どうもやりにくい（笑）。それで、私が「大学生よりは中高生のほうが好きですから」って言って、中学校、高校で働こうということになったんですけどね。

それで、その子どもたちに「おはようございます」「おはようございます」と、ちゃんとして返さなきゃ駄目だよという指導もするんですけども、それはこの世の仕組みがそうだからなんです。この世の基本的な仕組みは「おはようございます」には「おはようございます」を返すのが、この世の仕組みのもう基本なんです。だから、「おはよう」には「おはよう」、労働には賃金、点数と合格、全部、交換なんですよ。あと、お中元もお歳暮もですね。成人式の祝いに5万円もらったら、卒業の祝いに5万円を返さなきゃいかんわけですよ。この世の仕組みはみんな何か等価の交換で、「目には目を、歯には歯を」で貫かれてるんですね。

もちろん、私どもの、私みたいに修道会っていう、修道会に入るとる者は、シスター方も皆さんそうですが、労働と賃金が交換にならないんです。もう、私も相当、高給取りなんですよ。給料もボーナスも手当も洗いざらい、地引き網のように会計に取られるんです。もう少し同情すべきですよ（笑）。全部ですよ。

例えば、ここで話をしましたら、多分、何か頂くんですよ。頂いたときに、「どうも今日はありがとうございました」って頂きますでしょ。頂いて、私がそれをこう、封筒をこう内ポケットに入れて、これは自分が稼いだと思って修道院に戻りますでしょ。で、雌鳥のようにこう温めておくんですよ。「生めよ、増えよ」っていう感じで。ところが、必ず1週間以内に会計、イタリア人が来るんです。こうして（ノックの音）。「西、鹿児島純心に行ったはずだ」。そうすると、私はそれを返さなきゃいかんですよ、「はい、はい、はい、はい」って言って。そうしたら、「初めから渡せば気持ちがいい」って言って（笑）、みんな取られるんですよ。だから、私はここに来ても一文にもならんんですよ。だから、話し方が初めからぞんざいなんです。

そういう、何て言いますか、何かをしたら何かが返ってくるっていうような仕組み

からずれているのがシスターたちです。だから何かこう、「これだけやりましたので、これだけ褒めてください」とか、「これだけやりましたので、これだけ頂きます」とかというような世の常からずれている学校なんですよ、ここは（笑）。ですから、何ていいですか、それがつまり単純に言うと、完結に言うと「聖書の教える愛」ですし、カトリックの精神の基本なんです。

やりとり・交換がこの世の仕組みですので、今、あいさつから始まって、もうそれが貫かれているんです。いいことをすれば褒められ、悪いことをすれば刑務所に行くんですよ。もう、やりとり・交換がこの世の仕組みですので、裁判所も弁護士さんも全部シンボルマークはてんびんなんですよ。右と左がバランスが取れていれば交換できるというシンボルなんです、裁判所もみんな。だから、やりとり・交換がこの世の仕組みであることは、ハムラビ法典からずーっと貫かれてるんですよ。

そしてまた、この体のほうもそうです、この体のほうも。体のほうも息を吸う、吐く、吸う、吸う、吐く、吐く、吸うです。栄養を摂る、使ったらまた補給するわけです。この出し入れ・交換を新陳代謝って言いますよ。すみません、中高の先生みたいになってるけど、分かりますか（笑）。新陳代謝っていうんです。その新陳代謝ですけど、皆さんもやがてお年を召されて、やがて息を引き取る時が来るんですね。そのときに、生徒たちにそうやって話すんです。

君たちも、やがておじいちゃんになって亡くなる時が来る。それがたまたま病院のベッドの上のことにしよう。こうして「酸素吸入マスクだよ」って。こうして「ハアー、ハアー」となるんだと。そうしたら、「ハアー」っていうときは、ここが曇るんだと。CO₂とH₂Oが出るから。それで、「ハアー、ハアー」。で、「ハアー」ってやった。「ほら、今、曇った」とか、いろいろ言いながらでないと、みんな聞かないんです。「ハアー」「今、曇ったよ」。それで、「吸ったから、今、透き通ったよ」って、こうして「ハアー、ハアー」。「ハア、ハア、ハア」と息遣いが荒いときは、ちょっとお茶でも飲みにいこうかで大丈夫だ。でも、「ハアー、ハアー」ってなるときは、そばを離れちゃいけないっていうアドバイスまでするんです。それで、こうして「ほら、吸ってるよ」と。

そして、そのとき、そこを遺族。遺族じゃない、まだ生きてる。家族がこう囲んでる。それで家族が囲んで、その右代表の君の孫になるぐらいの男の子が、おじいちゃんになった君に言う。「おじいちゃん。おじいちゃんの人生は何だったの？」って聞いたときに、君はさっき教えた四字熟語は答えんだらうって。君の、「おじいちゃんの人生は何だったの？」と、こうやって「新陳代謝」ってね（笑）。

それは、やりとり・交換、新陳代謝なしには人生は送れないけれども、自分の人生が新陳代謝のために与えられてあるとは誰も思ってないわけです。これを小学校の2年生に話してあげたことがあります。もっと丁寧に言いましたよ、ここは相当ずさん

ですけど（笑）。こうして「新陳代謝」って言ってあげたんです。そうしたら、小学校2年生ですよ、小学校2年生がこうして足で床を踏みならして「あり得ねー」って、こうして（笑）。ここの反応は薄かったですけど、こうして、もうゲラゲラ笑うんです。だから小学校の2年生も、その出し入れ・交換が人生、そのために与えられてあるのではないことをもう腹の底から知ってるんですよ。

じゃあ、小学校の2年生が知ってるっていうことは、もっとその前に教えてもらってるんですね。もっとその前っていうと、もうさかのぼれば赤ん坊のときで、赤ん坊のときに必ず掛けていただいた言葉がありますと。例外がありません。

こうして、赤ん坊はこうして、こう。こうして、こう。ちょっと小さ過ぎますが、こうして、「よし、よし」と。「よし、よし、いい子」って言ってもらったんですよ、みんな、例外なしに。そんな母親いないんですよ、こうして、「ははは、醜い」とか。必ず見つめて「よし、よし、いい子」なんです。お父さんが君たちの脇の下に大きな手の平を差し入れてくださって、こうして、「高い、高い、高い」ってしてくださいましたよ。そのとき、君たちは「高い、高い」ってしていただいたら、「ふ、ふ、ふ」って喜んだんですよ。いないんだって、そんなおやじは、何かこう「低い、低い、低い」って、こう（笑）。必ず、「高い、高い」だと。

だから、そのとき、君たちは「よし、よし」とか、「いい子だ」って言ってもらうための交換物件を、お母さんに何を差し上げたので「いい子だ」って言っていただきましたか。そうしたら、大体、校長の訓話っていうときは「気を付け、礼、休め」って言うと、大体、休むんですよ、みんな、こう何か。それで、そのとき、私がそのとき、「どうして、何を差し上げたので、君たちを『いい子だ』とか、『よし』とかおっしゃいましたか」って。そうしたら、みんなこう、それまで本当に休んだった子たちがやっぱりこう何か考えるんです。話し方も上手なんですけどね（笑）。だんだん、こうなってくるんですよ。

だから君たちがそのとき、お父さん、お母さんに差し上げることができたものは濡れ汚れたおむつと自分の体重と、そして時々浮かべる意味不明の笑み、それだけだ。それだけしか差し上げることができなかったお父さん、お母さんは、にもかかわらず、君に向かって「いい子だ、いい子だ」って、「よし、よし」って、そうやってあやしてくださいました。

だから君たちは、何かしたから「よい子だ」とか、何かできたので「いい子だ」とか、「よし」とか言ってもらったんじゃないんだ。君たちが何にもできなかったときに、人生の一番最初に「おまえは、よし」って、「いい子なんだ」って、そうやってあらかじめ既に宣言してくださる方をお父さん、お母さんと呼びますんですよ。

そうしたら、大体、もうウルウルなってるんです。脳みそまで筋肉みたいな子たち

がいるんですよ、うちの学校には。これ、だから、録音がちょっといけませんが、もうそういう子でもこうして「スン、スン（鼻をすする音）」ってなるんですよ。父、母は、だからそういうもんだと。

聖書も同じなんです。イエス・キリストっていう方が公的な活動をお始めになったとき、もう新約聖書の始めに書いてありますが、そのとき、天が開いたって。そして、天から声が聞こえました。「あなたは私の愛する子、私の心の喜びである」って。それは、イエス・キリストが活動をした後だったら、「ああ、素晴らしい活動をおまえはした」とか、「ああ、おまえは素晴らしい説教をしたから」。「あなたは愛する子、私の心の喜びである」という父なる神からの宣言があったのは、もしそういう表現でしたら、それは素晴らしい活動や素晴らしい説教や、十字架に命まで捨てて、人類のために自分の命まで捨てたので褒めてあげたんです。ところが、違うんですよ。何の活動もまだしておられないときに、既にあらかじめ天が開いて、イエスの上に声が出たんです。「あなたは私の愛する子、私の心の喜びである」って。だから、彼は人を愛することができたんです。順番が逆じゃなんですよ。

ところが、「よし、よし、いい子」っていうのを記憶してる人は誰もいないんですよ。どんなに記憶力がいい方でも覚えてないと思いますよ。「ああ、言ってもらった。赤ん坊のときに」、多分、そういう記憶をお持ちの方は人類ではありません（笑）。そういう人は人離れしてるか、病気です。「よし、よし、いい子」は記憶にないんです。記憶が始まるのは、善しあしからなんです。「それはいけません」という注意が始まる頃から記憶が始まります。だから神様の声は、ちょうど「よし、よし、いい子」っていう言葉を私たちが記憶していないように、神の声も聞こえないんです。でも、言われているんですよ、そうやって。確かに100%、確実に。神様の声は聞こえますので。私もお祈りもしますよ。しますけど、聞いたことは一度もありません。私も相当深いお祈りをします（笑）。

名古屋の修道院は25人住んでおりましたが、大体、修道院というところは年功序列なんです。頭脳が優れてる順番に並ぶんじゃないですよ。一番年の若い8人が前列にいます。2列目にやや年が、それで3列目はもう間もなくっていうのが座ってるんですよ。それで、8人ずつ3列に座って、院長っていうのが別格に1人座ってるんです、後ろに。私よりも年下でしたからね。投票で選ばれたんですよ。人を見る目がありません（笑）。

それで、こうしてやるんです。それから、お祈りをしますと、1列目っていうのは、かつて私が指導したような子たちが座ってるんです。その子たちは聖書の黙想のときも、もうこうして（笑）、こうなるんですよ。そうすると、私たち2列目も前へ倅えで。

それで、一番後ろは元気ですよ。これはもう「エッヘン（咳払いの声）」って、われわれがこうしていると「エッヘン」。なぜ元気かっていうと、前の晩、8時から寝てるんです（笑）、テレビも見ないので。8時から寝て4時に目が覚めてるんですよ。だから、もう5時の黙想の時間なんていうのは、もう彼らはものすごい元気です。こっちはもう教材の研究から何から大変なんですよ。もう夜中近くまでやって、やっと睡眠時間を取っても、また翌朝、眠いでしょ。いくらお祈りしたからっていったって、「ああ、黙想して心が明るくなったな」って思ったら、日が昇ってるだけなんですよ。

それは、何か因果関係は一切ないんです。全部、何ていいますかね、無駄に時間を捨てにいくのを祈りっていうんですよ（笑）。その「私は、何かを頂きにいきます」というのは、もう祈りじゃないんです。礼拝っていうのは、文字通り、ゼロを拝するんですよ（笑）。今のところは笑っちゃいけません。

要するに、何かしたので何か頂きますっていうのは、もう何ていいますか、いわゆるお祈りではないんですよ。それは、取り引き・交換にまいましたということです。これだけ、私、熱心にお祈りしましたので、つきましては下さってということです。こっちが中元を差し上げたので、お歳暮ちょうだいということです。そういうものではないんですよ。

神様の一番の得意技は沈黙です。だから、祈ったからって、あんまり効き目はありませんので、あまりカトリックに興味を持たないほうがいいかもしれません（笑）。何かしたので何か来ますとか、御利益とか、効き目とかというものは無縁です。ですから、隣の、近くに修道院がありまして、そこのシスターが、ここの修道院じゃないですよ、まったく別の修道会ですが、そこのシスターが「神父様、昨日、私、神様の声を聞きました」とって来ましたので、すぐ近くの病院に連れていきました（笑）。大体、そういうものは異常なんですよ。

じゃあ、何でさっきの天からの声が聞こえたんだってということになりますが、それは、だから先ほど言ったように母の胸の中で聞いた声のごとく、イエスも聞いたんですよ。つまり、もういいです、それ。こだわっていると話が行きませんので、自分で考えてください（笑）。

そういうやりとり・交換ではないということで、私は「校長は暇だ」とって先ほど言いましたが、実際に暇でして。ですが、管理はしなきゃいけませんので、管理の職務があるんですね。管理といえば、もう私学ですから、特にお金のことと人事のことなんですよ。でも、授業ももうしないので、私は公立の、皆さんよくご存じかもしれませんが、公立の校長先生なんか授業は持たないんです。しかし、私はもう授業なしには校長だけはとてもできないので、今、7コマやっているんですよ。

もうこれが楽しみでして、行きますと、行って宗教の授業ですよ。高校3年生ですよ。高校3年生で私の授業中、眠る子、1人もいませんので。1人もいません、私の授業中に眠る子は。みんな他の教科をしています（笑）。それで、私、それでも一生懸命めげずに話すんですけど、その宗教の授業、高校3年生ですので、今はもう受験の直近ですが、そういうときにこうして「君たち1人1人が私には札束に見える」という授業をしたんです。君たちは1人、授業料と県の補助金で1人80万だって。大学の場合は、その約倍ぐらいじゃないでしょうか。80万だと。だから、この列、5人いるでしょ、80、160、240、320、400。この列で400万だということを導入しましたら、生徒が「校長、自分たちは金っすか」って言うから、「それ以外には見えない」。「80、160、240、320、400。400万、締めて」って言ったら、「校長、神父っすよね。神父が人間を金で計算していいんですか」って言うわけ。「よいのだ」と。しかし、おまえたち、自分の担任の先生なんか、顎で数えてるじゃないか、プリントを配るときに。「あ、何人だ?」。それも1としか数えてない。「1、2、3、4、5」って。それも顎で、こう。でも、私はそれを80倍にして数えてる（笑）。80、160、240。そうしたら、賢い子もいるんですよ。「おい、みんな、ごまかされないように注意しろ」とか何とか言って（笑）。

それで、その後は授業教案に従って深めていくわけですから、ここでそれをする必要もないし、もったいないので別な話にいきますが、そうやって1人が80万円に見えるんですよ、福沢諭吉に。だから、そういうことを繰り返していると、カトリックの神父としての、何ていうかな、薄れていくんですね。人事とかお金とか、予算とか決算とか、赤字とか。黒字っていう字はありませんので、赤字とか。そういう、ずーっと悩ましいでしょ。そうすると、だんだん擦れていくんですよ。

それで、先ほど言ったように時間がありますので、水曜日の午後だけは1人暮らしのお年寄りとか、病院とか、ホスピスに、外出願いを自分宛てに書いて、自分で許可の印鑑を押して、水曜日の午後は行くんです。それで、行ったとき、名古屋の校長をしとったときですが、行ったときに、ホスピスに行きましたとき、おばあちゃんが、ホスピスですのもう静かに待つというところですけど、そこへ行きましたら、浄土真宗のおばあちゃんなんですよ。門徒さんだったんですね。で、私が行きましたら、「先生」って言うから、「はあ、いかがですか」って言ったら、「まあまあじゃ」と。それで、「先生、私、もう天国に行きとうございます」と言うんですよ。「何を言ってるの? あなたは天国じゃなくて、お浄土でしょ? 極楽浄土でしょ」。そうしたら、「天国に行きとうございます。行けますでしょうか」って言うんです。もう面倒くさいから、「行けますよ」って言ったんですよ。そうしたら、例えば私をもっとホリーな顔つきで「行けますよ」とかって言えば、「あー」って信じたかもしれませんが、この世俗的な顔

で「行けますよ」って言ったら、「本当でございましょうか」って疑うんですよ。だから、やっぱりああいうところで、「やっぱり聖人でないな」と思いました、まだね。あるいは、そのおばあさんが見る目がないのかもしれませんが、「行けますよ」って言ったんです。そうしたら「本当でございましょうか」。

そういうときのために、この聖書の金箔を持っていくんです、いつも。何ていいますか、ここ、革張りで金にしてあるんですよ。ここはこれでも構いませんが。そしてこう開き、これに弱いんです、日本人は。それで、こうキラキラさせながら、こうして開くんですよ。箇所は違っていいんです、そのおばあちゃんはどうせ読めないの。「ここにキリスト様ご自身のお言葉が書いてある」と。それで私が「門をたたきなさい。たたく者には誰にでも開かれる。キリスト様ご自身のお言葉です。だから、おばあちゃん、天国の門の前に行ったら、誰でもたたけば開くって、キリスト様ご自身がおっしゃってるの。だから、天国の門の前に行ったら、たたけば開くもんだよ」って言ったんです。そうしたら、「ああ、ありがたい教えで、南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏」って言うんですよ。

だから、私はこれで終わったと思って、次の人が待っていてくれるので、次の人のところへ行こうとしたら、ちょうどドアから出ようと、文学的に言えばですよ、把手に手を掛けて、こう開こうとしたそのとき、またそのおばあちゃんが「先生」って叫ぶんです。そういうとき、薄く舌打ちをするのが神父ですね（笑）。次に行くべきところがあるでしょ。聞こえない程度ですよ、チェッ、チェッ。それで、振り向いたときに笑顔になってるんです、「どうしましたか」ってね。そうしたら、そのおばあちゃんがこうして、「先生、私はもう骨と皮でゲーがつくれません」って、「たたけない」って言ってるんです。面倒くさいなど。「おばあちゃん、近頃のドアは前に立てば開くでしょ」（笑）。「もう天国の門は昔から自動ドアだよ」って言ったんですよ（笑）。そしたら、「ああー」「ああー」と、こう。もう今は、そのおばあちゃんも天国に行っておられて、きっと笑って今も聞いてくださってると思います。

本当にそうなんです。つまり天国は、これこれこういうことを自分はいたしましたので入るとこじゃないんですよ。天国は、行けば入るんです。土産が要るのは親戚の家にだけなんです（笑）。実家にお帰りになるときは身一つで、「ただいま」「ああ、よう帰った」なんです。それを何かこの条件をクリア、これを持ってくればって、「これだけお土産を持ってまいりました。つきましては入れてください」って言ったら、神様が「おまえの背中その荷物は何ですか」って言われますよ。こっちの積み立てより、罪の積み立てのほうがうんと大きいから。そんな足し算・引き算でないという本質を知ってほしいんです。ですから、どうぞ安らかにお逝きください。何の心配も要らないんですよ。それは、母の胸で「よし、よし、いい子」って言ってくださった、

それを神の国、天国っていうんです。私が何かしましたのではないんですよ。

だから、生徒たちにそうやって言います。きっと君たちがお父さんになったら、子どもは君たちと同じように息子だったとしよう。必ず確認するんですよ、5つまでに。必ずだって、例外なしに。そうして、「お父さん、どうして僕がかわいいの？」って必ず確認するんだって、表情や目つきや、言葉で、態度で。そうしたら、そのとき、駄目だよ。君たちが「ああ、この前、幼稚園で駆けっこ一番だったね」と。そしたら、息子は思うよ、「ああ、パパは僕よりお馬さんが好きなんだ」って。だから、そんな答えはしちゃいかん。そういうときは黙って抱き上げて、1回頬ずりの一つもしてあげなさい。そして、おでこを人さし指でちよんと。こうやって具体的に話さないと駄目なんですよ、申し訳ありません。こうして、ちよんと。これやるとクツといくからね、ちよんと優しく。そして、「おばかさんだな。『どうして?』は要らないんだよ。おまえだから、かわいいんだよ」って、そう言ってあげる父になりなさいって。

そうしましたら、その話が終わった後、体育館からみんな教室に戻りますでしょ。その途中で、6人が次から次に校長室に来るんです。こんな連中ですよ、柔道部の。「うっす」「うっす」「うっす」って入ってくるんです。すごい迫力ですよ、もう中身も全部筋肉だから。「うっす」「うっす」「うっす」。それで私が「どうした？」って言ったら、「校長、今日の話は久しぶりによかったぜ」って（笑）。非常に侮辱的ですよ。それだけ言って、出ていくんですよ。

その6人のうち5人は出て行って、1人だけ残りまして、もう卒業したからいいですが、B君っていうのが残ってて、これが「どうした？」って言ったら、「校長、自分の家はおやじとおふくろが一緒に住んでいません」「そうか」。「それで、今日、校長が言ったようなことを自分はおやじから言ってもらった覚えもありません」「そうか」。「でも、自分が父親になったら、絶対に言ってあげます」って、こう言ったんですよ。皆さんが誰も泣かんので、私が代わりに（笑）。ね、本当にかわいいでしょう。「そうか」と。でも、そのシクシクさせながら教室に帰すのは教育のプロじゃないんですよ。「うーん、しかし、おまえ、子ができるには相手が要るぞ」と言ったら、「うー」って言いながら。これがプロです（笑）。そうやって教室に帰しましたけどね。

「どうして?」を必要とする方じゃないんですよ、神様は。なぜとか、どうしてとか、何を理由にとか、天国に入るのに理由があるとしたら、「私だから」なんですよ。今の父親の答えのように「おまえは何故に天国に入る資格があると思っているのか」と聞かれたら、「私だからでございます」と。それ以外の理由は全部、交換ですよ。それを「聖書の教える愛」といいます。誰が、どこの親が自分の子どもを条件付きで大事にしますか、もともと。それは、やがて世に出ていく子のために世の仕組みを身に付けねばならんので、しつけ、教え、交換の原理を身に付けさせるわけですよ、この

世がそうだから。

もちろん、だから私の学校でも「おはようございます」に、「おっす」では卒業はさせないんですよ。「おはようございます」に、きちんと「おはようございます」を言うことができるようになった子に卒業証書は渡すんです。それはもう、この世の仕組みに入っていくわけですから。しかし、その子たちが、そのために私の人生は与えられているのではないということは、新陳代謝のために与えられていないということを知っているのと同じ程度に、みんな承知してるんですよ。確かに、やりとり・交換は人生を生き抜くための必要条件ではありますが、それだけで私の人生は十分に幸せではないんです。それを充実せしめるのを教えていますよ、聖書は。

結婚の、だからプロポーズも同じです。それも、もう教えています。名古屋の南山は男子部・女子部と別学で、女子校がありました。その子たちに言っています。君たちもやがて結婚相手が見つかる時、プロポーズのときに、結婚式で一番大事なものは指輪とか、ドレスとか、パールとか、そんなものはどうでもいいんだ、あんなものはもうおまけだって。結婚で一番大事なものは、仏式でも、神前でも、キリスト教式でも共通してるけど、誓いの言葉なんだって、2人です。私たちは夫婦として、順境にあっても逆境にあっても、病気の時も健康の時も、生涯、互いに愛と忠実を尽くすことを誓います。

もちろん、愛が誓われねばならんということは、水が高い所から低い所に流れるのに誓いは要らないんです。こうして、「生涯、高きから低きに流れます」という誓いは不要なんですよ。誓う水があったら、昇る水もない。愛が誓われるということは、不自然だということですよ、愛が。つまり、この世の仕組みのとおりには動かんということです。だから、順境にあっても逆境にあっても、と誓うんですよ。病気の時も、健康の時も、生涯互いに愛と忠実を尽くすことを誓います。

生涯を誓うんだから、相手の男の子がプロポーズのときに髪の毛をこうなでながら、「うわー、きれいな髪だね。サラサラじゃん。俺と結婚してくれ」というような男と結婚しちゃいかん。毛は一生保証できない。必ず抜け落ちるんだって。ここを見なくてもよろしい。減るんだと。そして、「君のそのつぶらな澄んだ瞳にほれたぜ」というような男と結婚してもいけない。やがて白内障。まして胸だ、お尻だ。「おお、いいじゃん」というような男と結婚してもいかんと。胸もお尻も一生、生涯、同じポジションにはないって。全部、万有引力に負けていく。

そうすると、そうでなくなった、それが条件で結婚したとすれば、君はそういう条件をクリアしてないので、別れてもいいことになる。生涯を誓うプロポーズは、だから、毛は抜け、歯は抜け、目は白内障って、そういうものでいいんじゃない？ だから、

それはもう1つしかないんだと、せりふは。「どうして私と結婚したいの？」と聞かれたとき、相手の男は少し照れたほうがよいとも教えます。あんまりサラサラ言うような男は底が浅い。「あ？ 今更か」。少いうつむき加減で、頬を少し染めるぐらいがよい。あんまり青森のリンゴのように真っ赤になる人は血圧が高いから（笑）、やめといたほうがよい。だから、うっすらとしたとき、照れくさがりながらも落ち着いた声で、こう言ってくれる人と結婚しなさいと。こうして……、静か過ぎて（笑）、もう終わってる方々です。こうして静かに落ち着いて、「おまえだからだよ」。全然、駄目です。あのね、これ、女子高生なら「キャー」って言うんですよ（笑）。つまり人たちだ。

「どうして私と結婚したいの？」って聞いたとき、相手は照れながら「おまえだからだよ。俺はおまえが好きやねん」って。「あなたがあなたであること」だけが、生涯変わらないんですよ。この「あなたがあなたであること」を宗教用語で靈魂っていうんですよ、魂って。あなたの持ち物はなくなるし、減るし、増えるし、消滅もします。しかし、「あなたがあなたであること」は不滅なんです。それだけは一生変化しないんですよ、「あなたがあなたであること」は。だから、プロポーズも「あなただからです」って言うのが多分、一番うれしいし、「お父さん、どうして僕がかわいいの？」って言ったときに、「おまえだからだよ」って。そうしないと、どうしての理由を挙げると、父はその子より理由を愛してるんですよ。だから、ぜひ、そういう誓いの言葉に当てはめて言えば、そういうことを言ってくれる人だけ結婚しなさいと。

そしたら、同じことが天国でもいえまして、天国というのはその場所があったりということよりも、イメージとして宗教的なことを説明しようと思って言ってるだけですが、「天国は何故に私は入れますでしょうか」「私だからでございます」です。そうすると、自動ドアなんですよ。私が負ってきた、背負ってきた、成し遂げた業によって、それと引き換えに入るところじゃないんですよ。だから、もう私は、もう既に聖人です。天国に行く人を聖人というので、もう私はそうです。で、皆さんも、何か信じられませんが、そうです（笑）。ですから、どうぞ穏やかに引き取りください。その何かじたばたする必要もないですし、しよせんやることなんか知れてますので、そういうことで。

これは、ちょっとカトリック教会の神父として申し上げると、福岡教区に宮原っていう司教がいます。あれが。あれがって、彼は私の同級生なんです。で、彼がいる場所で同じ話をしました。彼はカトリック教会の責任者ですから、司教は。後で、「何か教会の教えに背くようなことを話したかしら？」って言ったら、「またー」ってパシッとたたかれましたので、司教の保証付きです（笑）。ですからぜひ安心して、また言ってるけど、そういうことが聖書の教えの、本当にこう何といいますか、根本っ

ていますか、基本です。

で、交換と、駄目押しますと、右と左を交換して過ごしていくのが世の仕組みだと申し上げましたが、右と左を交換するためには先ほどの裁判職のマークと一緒に、てんびんが要るんですよ。右と左を比べるということが、で、バランスが取れたので安心して交換するんですね。従って、この世の仕組みの根本が交換だとすると、同時に比べっこの世の仕組みの、てんびんで量るということが、右と左を比べっこのということが、この世の仕組みの基本の双子なんですよ、交換と比較。

だから、本当に悲しみを知っている人は、その理由と交換で天国に入るんじゃないと。人間は「よし、よし、いい子」って何も言われたい、なし得ない先に宣言していただいた本来の姿がゆがむから、悲しいし痛い。「ああ、あなた病気でしたか。辞めていただいいていいですよ、他にいますから」って、これ、世の現実なんです。「あなたでなくても、こちらに別の人があります」って言われて、どれほど痛いし、悲しいかっていうことは、そして、それはてんびんに量ってるんですよ。あるいは、比べてるわけです。それは大変痛く、悲しいっていうのは、それが本来の姿ではないからなんですよ。

その痛みを世の人たちはいっぱい受けてるので、どうかこの大学で学んで卒業する方は、カトリックの精神であるそれを心のどこでもいいから、心に持って世に出たいです。そして、接する人に、学校の場合ですと子どもに、生徒に、例えば遅刻の常習者がおまして、担任が「また遅れてきたのか、おまえは」ってやってくるわけです。それを見たときに私はもうすぐに駆け寄って行って、「ああ、こうして叱られるのも分かってるのによく来た」って、そう言いましたよ、その生徒に。「この程度もできんのか」っていう叱る言葉は、「ここまではできたか」っていう言葉と全然違うんですよ。「ああ、来たくもなかったのによく来たね、ここまで」。

白い紙に赤い点が真ん中にある紙を子どもたちに見せたとき、「これ何だ？」って言ったら、「ああ、赤い点を打ったんじゃないですか」ってみんなが言ったので、「ああ、君たちは本当に不自由な人間だな」って。「これはね、もともと赤い紙だったんだ。それをみんなが寄ってたかって白く塗ったんだよ」と。その最後に1点だけ残った、その小さな赤い点が「僕はもともと赤いんだ」、そうやって叫んでるんだって、その点から。それをみんなが寄ってたかって、「おまえは白だ、白だ」って、そう言ってるんだよ。その小さな赤い点から、「僕はもともと赤い紙でした。紙なんです」って、もっと君たちは叫ばなきゃいかんって、そうやって話しましたよ。だから、自分が今できることを一生懸命やるっていうことは本当に大事なことだろうと思います。

もうその子たちに授業をするときに、本当に楽しいですよ。何ですか、寝てる子が

いまして、時々いるんです。それで、行きますでしょ。そうすると、女子校ってというのは非協力的なんですけど、男子校は協力的ですよ、眠っている子のところに叱りにいくときは。男の子ってというのは、男子校ってというのは、こうして協力してるんですよ、こうして。無言の声援を送るんです、私に。「行けー」っていう顔してる。それで私も「よし」って、眠ってる子の頭をパツとたたくと近頃はこっちの首が飛びますので、眠ってる机の隙間のところに聖書を落とすんですよ、バーン（聖書を落とす音）「神は愛」とか言って（笑）。そうすると、その子がぶーっと、「わあー」とびっくりするとこを、みんなが「わあー」って喜ぶのが男子校なんです。

ところが女子校は非協力的ですよ。眠ってる。ちきしょうと思いつながら、こう行くでしょ。行きましたら、「リカちゃん、来たよ。来た」って警報を出すんですよ。「来た」って。私は西です。まあ、いいです。そしたら、だから、私が「起こさなくてもいい。リカちゃんは昨日、高い熱を出した。だって、お母さんが一晩中、眠らずに看病してあげてたんだよ。だから、この宗教の時間ぐらひは眠らせてあげなさい」って、こうやって言うと、リカが「先生、皮肉はやめてください」って起きるんです（笑）。だから、人間は正しく理解されることによってよりも、美しく誤解されることによって成長するんです（笑）。

だから、大体、すみません、中学・高校の立場からいうと、眠っている子を見て、眠っている姿しか見えないのは教育者じゃありませんよ、もう。それは免許も要りません、それで教員が勤まるなら。眠ってる。通りすがりのおじさん、おばさんでも、イシザワさんでもできますよ。こうして、「ああ、眠ってる」。ところが、こうして行ったときに、その眠ってる子の姿の向こうに、どれだけそのストーリーを思い浮かべることができるかっていうことです。その目に見えるものの向こうに向かって投げ掛ける言葉なので、本人は目覚めるんですよ。

サンマを見て、サンマしか見えないのはネコなんですよ。「サンマだニャア」で終わりです（笑）。それで、かぶりつけば終わるんですよ。しかし、サンマを見て、サンマの向こうにそれを取ってくれた漁師さんがいるんですよ。腰が痛いんですよ。それを市場まで高速を使って夜通し寝不足の中、運転してくれたトラックの運転手さんがいるんですよ。それを買い求めて焼いてくれた母がおり、それを買うためのお金を稼いでくれた両親がいるんですよ。それが、皿の上のサンマの向こうに見えるので、人間だけが手を合わせて「いただきます」を言います。

ネコも見えたら、祈りますよ（笑）。「ああ、漁師さんも大変だったニャア」。それで、そのネコがカトリックなら、「父と子と聖霊の御名によって、ニャアーメン」と言うんですよ（笑）。ところが、ネコには宗教がないんです。サンマしか見えんから。だから、人間にしかないんですよ、宗教っていう現象は。なぜかという、サンマの向

こうが見える力を与えられてあるからです。それを開くのが授業なんです、中高で言えばですね。

もちろん、高校生で漁師さんとはいわないんですよ。生産者っていうんです。トラックの運転手さんといわず、流通業者っていうんです。母を消費者、父を労働者っていうんです（笑）。そうして、サンマの向こうにある世界を開く授業を社会科っていうんですよ。で、このサンマの向こうを、この海流に沿って回遊し、ここで産卵し、うんぬんってやるのを生物っていうんです。そのサンマはこうやってお料理するとおいしくできますとやるのを家庭科っていうんですよ。そして、このサンマの、皿にのってるサンマの家族は海の底でお葬式をしてるっていえば、金子みすゞになるんです（笑）。だから、国語にも家庭科にも、生物にも社会科にも、全部なるんですよ。

それぞれのプロフェッショナルが1匹のサンマの向こうを開いてあげるのが授業なんですよ。ああ、そんな背景があるんだ。だから、子どもたちは「じゃあ、校長先生、キツネは森の奥深くにも住んでるけど、時々うどんの上にもるね」と（笑）。

これ、聖書ですが、重いね、これ。こうすると、鳥になるんですよ。受けませんね（笑）。これ、鳥になるの。鳥を見るときに、鳥しか見えない人は眼科ですよ。鳥が見えてるとき、鳥の背景が必ず見えてるんです。また、見えてないと、鳥って分からないわけですよ。「私はたぬき」「僕はきつね」って言うのは、そば屋の注文なんです。だから、イエス様は「鳥を見よ」って言わず、「空の鳥をご覧なさい」「野の花をご覧なさい」っておっしゃるんですよ。

自分の勉強っていうか、学びはいつもテキストの背景にあるコンテキストを、背景の中において初めて了解できます。それがなかったら、本当に勉強っていうのはむなしいものです。「数学なんか勉強しても何の役にも立ちませんよ」って子どもたちに言いますよ、私は。みんな大賛成ですね。だって、「数学を勉強しても何の役にも立たないよ。お母さんに聞いてごらん」って。買い物するときに連立の方程式を立てて、買い物するお母さんはいらっやらないって。今晚のおかずは肉じゃが。牛肉Xグラム、おつりはY円とか、そうやって買い物したら本当に救急車で運ばれるよ。「あれ、この白菜って大体、放物線？」とか、そんなこと考えるお母さんいらっやらないって。まさか、君たちがデートのときに「ほら、あの三角形とこの三角形、合同じゃん」とか言ってごらん。恋は終わるって。

だから、数学っていうか、もう必要なものは小学校のときに習ったんだって。足し算と引き算と、おつりと金利と割り引き。それができたら、世の中暮らしていけるの。なのに、君たちは使いもせず、役に立ちもしないものを勉強させられて、取った点数でできる子、できん子と比べられ、ましてランクまで決められて何とも思わんかね。悲しくないかね、そんなために勉強してるのが。言われたからするのかなって。

数学も同じだよ。お皿の上ののってるサンマがあるんだって、もう目に見えて分かっていること、与えられてある条件、それを与件という。その分かっていること、既に与えられて知っていることを使って、まだ見えない向こうにある答えを正しく推理、推量して得た答えを誰にも分かるように、誤解されないように、正しく表記、表現する力を身に付けるのを数学っていうんだって。

だから、数学を一生懸命勉強する子は、目の前のサンマを見て漁師さんの痛みを正しく言い当てることができる。それを表現し、「ありがとうございます」と言える人間になるために数学は勉強するんだ。だから、数学を一生懸命勉強する子は心の優しい子になるんだ。国立の大学に合格するために勉強しとるんじゃないって。

君たちは、僕は、ネコではありません、人間なので。人間になるために勉強していますと。だから、そのためのお勉強だと思ってしっかりと励みなさい。こうして話してる途中でも、もう寝てますけどね。でも、伝えたいことは伝わるように、もう何度も何度も繰り返す言うのが中高の現場の現実です。でも、何度も言います、そうやって。もうだいたいべらべらしゃべり過ぎて、何かまとまりのない話ですみません。呼んだ人の責任です、私を（笑）。

一つだけ申し上げておくと、私は先ほども言いましたが、結婚式をしますときに、職場の上司っていうことであいさつをしなきゃいけないでしょ。もう何件もあるんですよ。お祝いのお金も出さなきゃでしょ。そのたび、会計にもらいにくんです。「またかー」って（笑）。私が結婚するわけじゃないですよ。それで、それこそ舌打ちされながら渡されるお金を。舌打ちは聞こえないけど、心の中でしてる表情が、私は読解力がすごいので、目に見えて聞こえるんです。目で聞くんですよ、「あ、打ってる」という感じで。そうやってやりますでしょ。だから、仕返しを披露宴のときにするんです。

「職場の上司の校長」「ただ今、ご紹介いただきました西でございます」と、こうやって話しまして、あそこにケーキがありますと。ウエディングケーキでしょう、あれは。普通、2人は着席させるんですが、「短いから立ったまま聞きなさい」と言って聞かせておくんですよ。そうしないと、自覚しないから。立ってなさい。それで、2人はこうして。新郎はもうこうでしょ、新婦はこう。

それで、あそこにあるのはケーキだね。あのね、司会の言葉遣いを聞いても分かるでしょ。縁起を担いで、「これで披露宴をおしまいにします」とか、「終わりにします」とかはおっしゃらないでしょ。「これにてご披露宴をお開きといたします」とか、言葉の隅々まで気を使ってなさってる。にもかかわらず、主役の2人が手に手に刃物を持って（笑）、見つめ合いながら、あんたと私もこれまでよ。「こんな不吉なことは誰

に教わったんだ」と言ったら、2人とも……。だから、「聖書が教える愛」というのは、そうやってわが身を裂いて、今日からこの人のために私は自分の身を裂いて差し出しますという、その覚悟の入刀なんだ。だから、笑顔を浮かべてはならん。引き締まった覚悟を決めて入刀しなさい。以上。

本番になったとき、「先ほどは厳しいお言葉がありました、ここは一つ笑顔で」(笑)、司会が言うんですよ。でも、私はずーっと見てると、こうして。これで仕返しが済んでるんです。

だから、要するにクリスマスのケーキもそうなんです。これもショートケーキは駄目なんです。なぜかという、神様が、唯一の神様がご自分を裂いて、父と子ですね、割って、割り裂いてくださったんですよ。だから、お父さま、お母さまは子どもに向かって、「今日、神様はご自分をこうして裂いて与えてくださったんだよ」って。それが母の言葉なら同じように、「お父さんも、おまえたちのために毎日こうして身を裂いて働いてくださってるんだよ」って。そうしたら、お父さんがバトンタッチして、「お母さんもそうだよ」って言って、子どもに語り聞かせながら切り裂いて差し上げるので、意味があるんですよ。

そのウエディングケーキもクリスマスのケーキも、それからお誕生日のケーキも同じです。お誕生日っていうと、女子部に勤めておった頃、中学3年生の子が校長室に来て、「校長先生、聞いてください。この前、お姉ちゃんの誕生日のときはこんな大きかった、ケーキが。私のときは小さい。親の愛は薄い」とかって来たんですよ。

あのね、お誕生日のケーキっていうのは、お父さん、お母さんが子どものために買ってくださいるもんじゃないんだよ。もともと、お父さん、お母さんに子どもが買って差し上げるものなんだ。君がまだ小さかったから、お父さん、お母さんが買ってくださっていたかもしれないが、もう来年は高校1年生だ。今月からすぐに100円ずつためなさい、お小遣いを割いて。それで1,200円にして、その1,200円で買える小さなケーキでいいから買って、袋に「触るな」と書いて。すいません、全部、こう具体的指導で。

冷蔵庫に入れなさい。そしてお父さん、お母さんがお仕事からお帰りになるのを待って、帰ってこられたら「お父さん、お母さん、座ってください」と言って、その袋は破って、左手にケーキ、右手にナイフを持って、そのテーブルの上まで来て、いったん置きなさい。危ないからね。それで背筋を伸ばして、改まった声で「お父さん、お母さん、今日は私の誕生日です。お父さん、お母さんは私のために今日まで私を生み育ててくださるために」。で、刃を当てなさい。「このケーキのように自分の身を裂いてくださいました。これはその身を裂いて生み育ててくださったお母さんへの、お父さんへの感謝の印です。小さいけど食べてください」って差し上げるための道具だ

よって言って。

そしたら、翌年、そのとおりにしてるんですよ、その子が。なぜかという、両親そろって学校におみえになったんです。両親そろって学校におみえになるとき、ろくなことはないですよ（笑）。もう、「うわー」と思って校長室にお通したら、その両親が座ってる後ろで、その子がピース、ピースってやってるから（笑）、悪い話じゃないと思ってほっとしたら、お父さんが「実はこの前、娘の誕生日でして」。もう、そこでハンカチが目についてるんです。「自分たちのためにケーキを買ってくれまして、今日まで身を裂いて……」、うーっと泣き出して、お父さんが、大体、冷静なのはお母さんのほうでして、「何、泣いてんの、この人」って感じです（笑）。ハンドバックから紫の袱紗、紫の袱紗っていうと大体入っているものは決まってるんです。私の目も輝きました（笑）。そうして、こうハラハラって。案の定でしたよ。あまりそこで笑みを浮かべないのを憤みといいますね。「どうぞ、学校のためにお使いください」。その束、封が切ってないやつですよ。「どうぞ、お使いください」って言って出すものだから、「いやいや、こういうものは受け取れないんですよ」って一応言うから（笑）、お納めさせていただきましたけど。

だから、先生方にも申し上げたいが、真実はお金にもなるんですよ（笑）。やっぱり、「何かそんな理想論を言っても」っていうより、むしろ事柄の本質と真実はもう不動なんです。変わりませんよ。そこを自信を持って語っていただくっていうのは、私はカトリックの精神について揺らぐことのない確信を持って、何か、どこかにそれをしっかり持っておいていただいて学生の皆さんに語り掛けていただければ、何ていうのかな、血流のように温かさがその手の平にも指先にまで伝わって、きっと伝わっていくんだろうと思います。私はどんなに、どんなことがあってもめげませんので、何度でも。「愛は忍耐強い」というのが特徴です。もう「廊下を走るな」と言っても走るんですよ、来る日も、来る日も。で、私の言葉も「走るな」が、来る日も、来る日もです。そして、やがて彼ら卒業して、私も去りますけど。もう終わります。すみません、長いこと。本当に忍耐強く聞いていただいて。それも愛です。

もうこれで締めくくりになりますが、締めくくりのごあいさつですが、私は着任の折、名古屋から長崎に着任しましたときに、すぐ近くに、長崎に純心の中学・高校がありますので、位置的には見下ろす場所にあるんですね。見下すとも言います、こう。私の学校は上野の丘の上にあります。で、純心というのは文教町という所の、何というか、どん底にあるんです（笑）。それで、私はこう下っていきましたら、相手は先輩でもあります、修道者の。それで、ごあいさつに上がったんですね。それで、お名前が東っていうんですよ、シスター東って。西が東のところにあいさつに行ったんです

ね。

大体、こっちに移る前も生徒に同じようなことを言われたんですよ。行きましたら、校長室に大きな日本地図を持ってきたんですよ、生徒たちが。よく出入りしてました、生徒たちが遊びにきていましたから。大きな日本地図を持って、「校長、名古屋はここですよ。長崎、思い切り左っすよね。左遷ですか」とか言われたんですよ（笑）。だから、私が「何を言うか。お前から見たら左だ。私から見たら右だ。そういう右とか左とかにこだわってるようでは、おまえ、人間として成熟がまだ足りん」って言ったら、「ははは、負け惜しみはやめましょう」とか言いながら（笑）、それが最後のあいさつでした（笑）。

それで今度は長崎に着任して、西が東のとこ行ったんですよ。そうしたらシスターが、「ま、西さまですか。私は東です」って言うんですよ。言わなくても分かります。「東は昇りますよね。西は沈むんですよ」って。どういう指導をしてるんだろと思った、ここの修道会は（笑）。確か、純心聖母会って言うんですよ。それで、私が言いましたら、だから、生徒たちに私は言いました。いや、その話はしていませんよ。あ、これも伝えないでくださいよ。

だから、思い切りロケットを使って宇宙に飛び出してごらん。お金は要らん、想像するだけだから。シュッと。そしたら、お日さまは昇りもしないし、沈みもしてない。西も東もないって。右も左もありません。お日さまはじっとして、地球のほう回ってるんだって。だから、時々、この世の仕組みとか、痛いなって思ったときは、はっと空を見上げて突き抜けてごらん。そしたら、右とか左とか、上とか下とか、東とか西とか、何もないって、そこは。「全部、錯覚なんだな」って分かんると、君はきっと神様のことが少し分かる。だから、ぜひこれから歩み出していく人生の中でつらいことがあったら、そうしなさいと。

いい風は吹き来たって、「ああ、いい風だな」というときは、もう向こうに行ってる。向こうの木の葉を揺らしているのが、いい風だって。「ああ、いい風って思ったとき、それは僕」って、こう、そういうのを竜巻っていうんだ。「さっと吹き来たって、さっと吹き去る男になれ」と言ったら、「かっこいいじゃん」。出てくるんですよ、それを霊性っていうんです。カトリックの精神ですよ。「さっと吹き来たって、さっと吹き去る」っていう、その表現に「かっこいい」「素敵だね」っていう感覚を持ってるんですよ、人間っていうのは。

だから、お礼も、今度、卒業式が間もなくうちはありますが、「寄せ書きと花束を」って言うから、「要らん」って言ったんですよ。「気持ちは分かるが、要らん」って。「もし感謝したいなら、君たちが、そうだね、40も過ぎた頃、独り立ちして生活できるようになってから来てくれ。その頃、私は岐阜県多治見に修道院があって、そのの

墓地にいる」って(笑)。「そこに来てくれ」と、そして「先生、おかげで曲がりなりにもこうして一人前に暮らしてます。ありがとうございますって。「そう言ってくれば、それが一番うれしい」って、私。「そのとき、墓石を揺らして喜ぶ」って、こう(笑)。だから、「そういう男になりなさい。何かやったら、お返しをもらわなきゃ立ち去らんような人間であってはならん」って。だから、ぜひそういう人生観を持った人間として育つように願っているということを伝えております。

「聖書の教える愛」について、さあ、触ったのか知りませんが、もう終わりです。ありがとうございます。(拍手)

【質疑応答】

岡村：先生、本当にありがとうございました。心温まる、楽しい、そして感動的なご講演をありがとうございました。それでは、ただ今から質疑応答に入りたいと思いますが、何か、皆さまお気軽にご質問、ご意見、あるいは感想があれば挙げていただけたらと思うんですけども、何かございませんでしょうか。はい、じゃあ。

教員1：先生、どうもありがとうございました。楽しくて深い話をどうもありがとうございます。実は私、今日、すごく楽しみてまいりまして。なぜかと申しますと、うちの娘が純心高校なので、この間、娘2人なんですけども、帰ってきて下の子が「今日の黙想会はすごい楽しかった」という話をしていて、「まじなの？」って言ってまして、「そんなにすごい？」って、2人で「こんな話だった」と言うんで、すごい盛り上がって話をするんで、そんな先生のお話なら私もいつか聞いてみたいと思っていました。早速、聞く機会を頂きまして、本当にありがとうございました。

先ほどもちょっとご紹介ありましたけども、先生、好きな作家が山本周五郎ということで、私もとても大好きなので、もしよければ好きな作品を教えてください。というのと、聖書、あるいはキリスト教の考え方と山本周五郎の作品について何か先生のお考えを教えてくださいませんか。

西：何か入学試験の口頭試問みたいな(笑)。私はもう、一番最初に読んでファンになったのが『樅ノ木は残った』です。あれがもう衝撃的で、一番、何ていうか、もう読むのが楽しかったです。もう今、3度目、読んでます。まあ、3度といっても少ないかもしれませんが。

本当に、何ていいますか、与えられた場は限られているし、自分が与えられている条件もあるし、その中で、何ていいますか、彼は、私は沈黙っていいですか、全部を述べないっていうか、説明してしまわないっていうか、言葉でです。『樅ノ木は残った』の原田甲斐も同じですが、全てを語らずに。もちろん、それが分かるように作品は表

現されていますが、何を考えているか、でも、それを全部を説明せずに淡々とか、黙々と受け入れて担っていくという主人公の姿ですね。それが何ていうか、自分も、私はよくしゃべるのでちょっとかけ離れてますが、私のことを本当に知っている人はこの原田甲斐と自分が同じだって分かってくれるだろうなという淡い期待があって、ととても感動しています。今、一例をいえば、そういうことで、どの作品も私はそういう彼が持っている、本当に何ていうかな、論理的にとか、説明的にじゃなくて、言葉と言葉に相当、何か隙間があるっていうのか、そこを埋めていくのが楽しみです、彼の作品を読むとき。

そして実際、今のことで生徒たちに話したこともありました。すいません、ちょっとずれちゃいますけど、「その朝、私は急ぎの用があったので、慌てて家を飛び出した」という一節があって、そこを、それで生徒たちに「ほら、これ、ほとんど省略されてるでしょ」と、「その朝、私は急ぎの用があったので、朝、起きたらすぐに家を飛び出した」。パジャマのままかとか、歯は磨かなかったのかとか。

で、文学っていうのは全部そうやって省略するんだと。逆に言うと、言葉では全部語り尽くせないんだって。例えば、起きるためには90度でしょ。90度の手前は45度を経過せにやでしょ。22.5でしょ。それを全部言葉で語り尽くすことができないので、起きるといえば、そういうことだっていうふうに、事柄に全部隙間があるよって。それを埋めていくことができる力を読解力という。

そう言って、だから相当、彼の作品を読むことによって自分は人間の心理とか、事柄についての理解の読解力を相当鍛えられたと思います。だから、彼には感謝しています、そういう意味では。もちろん、義理人情の何か持ち方についても非常に参考になりましたが、私は一番、学べたのはそれですね。隙間が非常に多いので、それを理解していくのに非常に何か役に立ちましたです。

教員1：ありがとうございます。

岡村：ありがとうございます。他にご質問等、ございませんでしょうか。はい。

教員2：今、虐待という問題。DVとか、虐待の問題がいっぱい出てきますよね。そういったのはどのように考えられますか。

西：私は、それについてはちょっと今、何ていいますかね、深く考えたこともないし、事例もしたことがありませんので、今、ちょっと感想そのものがまず出てきません。

一つだけありましたのは、「自分も大事にされませんでした」と叫んでました。その虐待していたお母さんがです。それも相当、長い時間、面談してお話をしました結果、泣き叫んでいました、そうやって。「私だって、かわいがってもらったことがない」と言って。あれは、3ヶ月ほど週に2回ずつ面談を重ねました後、やっと何

か叫んでいたという、その一例をもって全部を推すことができませんので。ただ、そういう要素はあるんじゃないかと。

だから、もちろん虐待を加えた人は、例えば親は、当然、何ていうのか、悪いことをしてるんですけど、それをまた下手にかばう必要もありませんが、ただ事実を知るためにその人の、やっぱり先ほど言いましたように背景があるんだっていうことの可能性は残して解釈してあげたり、癒してあげたり。その方も癒しが必要なんだろうと。その方も大事に育てていただいていたら、何ていうかな、自分の子どもをぶん殴ったり、虐待したりすることはなかったんじゃないかと強く推定されるというか、そういう思いもあります。そういうことは考えたことはありますけど、何かこう、それ以外のことはあまり考えたり学んだりもしてませんので、申し訳ありませんが、それくらいで。

岡村：他にご質問、ございますでしょうか。じゃあ、よろしいでしょうか。では、最後にお礼の言葉をセンター所員の獅子目先生、お願いいたします。

【お礼の言葉】

獅子目：西先生、ありがとうございました。年度末のご多用の中、しかも足元の不如意の中、遠路お越しいただき、本当にお礼を申し上げます。何よりも、ご講演の見事さに感服いたしております。説教の上手な神父様ということはつとに耳にしておりますが、本当にあっという間に時間が過ぎてしまいました。時に笑いを入れながら、時にしんみりとした気分にはさせられて、心が大きく翻弄された時間だったように思います。

ある方が西さまのご説教について、こう評しています。「どこかで聞いたり、読んだりした話ではなく、彼自身が作り出した説教ネタなのですね。ここが彼の説教の魅力なのでしょう」。そのように評していらっしゃるんですけども、まさに借り物の言葉とか、あるいは抽象的な美辞麗句とか、そういったものは使わずに、確実に多分、学校のほうで子どもたちの心をしっかりとつかみながら過ごしていらっしゃるんだろうなと、そういうふうを考える自分でした。実感のこもった言葉、あるいは具体的な体験に裏打ちされた言葉でなければ、そこから感動は生まれれないなということを改めて感じたところでございます。

皿の上のサンマ、目に見えないものを見る力、その向こうにストーリーを描ける力、そういったものは私たち大学の教員にとっても本当に必要な力だろうなと、そういうふう考えたところでございます。見事な話術の向こう側に人間に対する深い理解、あるいは愛情、何よりも確かな教育哲学というのをお持ちでいらっしゃるなという

ころに感服しております。

今後、私たち大学に勤める教職員、学生に向かうに当たって、本当に「あなたがあなたである」ということの素晴らしさ、その上でそういったものをしっかりと核に据えながら向き合っていきたいなと思っているところでございます。どうか、今後ともご指導、ご鞭撻のほう、どうぞよろしくお願い申し上げます。(拍手)

岡村：ありがとうございます。では、これで平成30年度キリスト教文化研究センター公開セミナーを終わらせていただきます。ご講演をいただいた西先生にもう一度、拍手を。(拍手)では、どうもありがとうございました。